

ひと足お先に
愛媛暮らしを
愉しんでいます。

私の移住体験談

愛媛に惹かれ、実際に移住を決断した先輩たちの体験談を紹介します。
海、島、山、街と、さまざまなシーンで営まれる、
十人十色の暮らしぶりがみられます。



島暮らし

大三島リモンチェットロに 想いを乗せて

山崎 学さん(44)、知子さん(38)
【東予エリア】今治市上浦町(大三島)在住



夫婦の愛情が詰まった レモンのお酒を手作り

しまなみ海道のほぼ真ん

中にあたる大三島の住宅街に、一見、カフェのようなレトロな造りの「Limone(リモーネ)」があります。お店を営んでいるのは、平成20年に東京から大三島に1ターン就職した山崎さん夫妻。もともと、ご主人の学さんは営業職、奥様の知子さんはOLでしたが、結婚して7年経ち、仕事も忙しくなる中で、このまま東京で仕事を続けるか、知子さんがイタリアに留学していた時に魅了されたレモンのお酒を造るために移住するか悩むようになりました。

当初は、移住はもっと年を取ってからと考えていましたが、移住された方の所を巡るうちに、同じ年で頑張っている方に出会い、スタートはなるべく早いほうがいいと移住を決意。レモン栽培と加工ができる大三島に移住を決めました。平成21年4月に酒類販売業の免許を取り、5月にお店をオープン。10年前まで酒屋だった空き家を夫婦で4ヶ月かけてリノベーションした店舗で、大三島の自然と山崎さんの愛情が詰まった深みのある柑橘リキュール「リモンチェットロ」を販売しています。



① 島内に田舎を借りて無農産物のレモンや八朔、伊予柑等を栽培
② 大三島のレモンやヤマモモ、マレードの他、パ
③ トロリと甘く、後味は酸っぱいリモンチェットロ。仕込み分がすぐ完売してしまうほど人気

愛媛暮らし アドバイス

やりたいことがあるならスタートは早いほうがいい。とにかくやってみること！先に移住された方の話をよく聞いてイメージすることも大事ですね。

街暮らし

東温市で感じた イタリアの風

青江 博さん(42)、志帆さん(35)
【中予エリア】東温市在住



東温市の食材を生かした 心の料理でおもてなし

松山の市街地から車を走らせること約30分、国道11号線から県道へ入ってすぐの住宅地に、県外からもファンが訪れる人気イタリアン「ロカンダ・デル・クオーレ」があります。

大阪出身の青江博さんが、奥様の志帆さんの出身地である愛媛県の東温市に店を開いたのは、料理修行をしていたイタリア北部の町と東温市の風土が似ていたから。青江さんは、イタリアからの帰国中、愛媛でレストラン開発をしている先輩に誘われて、はじめて愛媛を訪れた時から、「いつかこの場所で店を持ちたい」と夢見ていましたが、周りの人から「この場所で商売が成り立つのか。いきなり独立してうまくいくのか」と心配されたため、まずは移住の準備期間として、大阪のイタリアン激戦区で3年間腕を磨きました。その間に、娘の心萌ちゃんが誕生し、豊かな自然の中で子育てをしたいと移住を決めました。

「ロカンダ」は、イタリア語で田舎の宿、「クオーレ」はハートという意味。店名には「心の料理を楽しみましょう」という願いが込められています。現在は、イタリアと愛媛の絆を深める活動にも積極的に取り組んでいます。



① もともと農作業の経験は自分たちの手で改良した店舗
② 遊びに来てくれたイタリアンアーティストのカルロゴッリ氏が描いた壁画
③ 人知れぬユニークな愛媛産のジャガイモのニョッキをトマトソースでシンプルにあえたローマ風ニョッキ
④ 店舗のすぐ裏に住居があり、家族と過ごす時間も大切にできる

愛媛暮らし アドバイス

都会にはない自然の中で四季の移ろいを感じられるのが愛媛の良さ。そういう愛媛の豊かな風土を感じて欲しいですね。

海暮らし

夫婦でみつけた 心豊かな暮らしの拠点

二宮 健さん(45)、真理子さん(41)
【中予エリア】伊予市双海町在住



地元の身近な素材を使った モノ作りの楽しさを伝えたい

「しずむ夕日が立ち止まる町」のキャッチフレーズで知られる、伊予市双海町の海辺で暮らす二宮健さん真理子さん夫婦。東京と沖縄で教員をしていた2人が出会ったのは、旅行先の北海道でのこと。お互い教員同士だったため、結婚後も7年間、離れて暮らしていましたが、健さんが、ご両親の出身地である愛媛県の教員採用試験に合格したのを機に、愛媛県への移住を決めました。当初は松山市郊外のアパート暮らしでしたが、「せっかく愛媛に来たんだから、自分たちなりの生き方ができる土地を探そう」と車を走らせて「売り土地」の看板を見て回っている時に、美しい海岸を眼下に望むこの土地に出会い、憧れのログハウスを新築して移り住みました。

「モノを作る心豊かな暮らしがしたい」と大好きな沖縄で焼き物の勉強をはじめた真理子さんは、自宅の裏に念願の薪窯も2年かけて手作りし、子育てが一段落してから本格的に作品作りを再開。近所で焼き物に使える土や陶石が入手できると知ってからは、「なるべく地元の身近なものを使ったモノ作り」をモットーに、ここでしかできない作品作りに取り組んでいます。



① 高台に立つログハウスは、北海道で知り合ったご夫婦の昔からの憧れを実現したもの
② 2000個のレンガを自分で焼んで作った念願の薪窯
③ 真理子さんの作品がずらりと並び「海風窯」のキャタリー、陶芸教室も開催している

愛媛暮らし アドバイス

愛媛は温暖な気候にもかかわらず、車で1時間ほど走ればスキーも楽しめます。ただ、郊外で暮らすには車は必需品ですね。

山暮らし

理想の山里で紙漉きの 魅力にどっぷりハマる

平野 邦彦さん(49)、富希子さん(46)
【南予エリア】鬼北町在住



15年かけて見つけた田舎で 念願のスローライフを満喫

四万十川に注ぐ広見川が流れ、穏やかな山里が広がる鬼北町で、農業のかたわら、後継者不足に悩まされていた鬼北東貨紙保存会の会長として紙漉きの復興に取り組む平野邦彦さん。

学生時代から田舎暮らしに憧れ、15年近く理想の田舎を探し求めたという平野さんの出身は山口県の下関。まずは、田舎暮らしがどういものか試してみようと、学生時代に大学を1年休学して全国の田舎をバイクで走り回っていた時に、たまたま空き家を貸してもらった鬼北町の山奥で暮らし始めたことが、この土地との最初の出会いでした。

その後、関東で就職してからも田舎暮らしの準備を続け、西日本を中心に約85市町村へ実際に足を運んで下見を重ねました。そうした中で、田舎暮らしの方法論として「新規就農」の道を選択。他の候補地は、新規就農に様々な制約がある中、当時の鬼北町は、自由度の高いスタンスで就農をサポートしてくれたことで移住を決意。現在も専業農家として万能ネギの栽培を続けながら、冬場は紙漉き中心のスローライフを満喫しています。



① 現場の人に紹介された晩年の住まいは、学生時代に住むなごころなどいろいろいいところをたまたまだけ見つけた。富希さんご夫妻の移住先は、同じ場所です。
② お酒に酔って住んでいた。平野さん自身が紙漉き保存会会長に就任してはじめて紙漉き
③ 現在は伝統的な和紙作りだけでなく、創作和紙にも挑戦している

愛媛暮らし アドバイス

田舎で「これやりたい」という目的があるのか、のんびりスローライフに憧れているのか、その違いを明確にした上で、自分にあった土地を探すといいと思います。